

5ヶ国と接しているハンガリーの 「交通安全のむずかしさ」

イレーヌ・パップ

Difficulty of Traffic Safety in Hungary
due to Border Crossing Vehicles from Five Countries

Irén PAPP

小林 ハンガリーからのお客様をはじめとお迎えして光栄に思います。先生は、確か日本へ来られたのも初めてですね。

パップ 今回来日はもちろんはじめてです。幸い日本文化協会を通じ、日本へ30日滞在する機会を得まして、日本の交通安全について勉強しております。これまでに、総務庁、全日本交通安全協会、大阪大学の長山先生、東京大学の越先生達のところへお邪魔しました。

小林 それでは私以上のノウハウをお持ちになっておられますよ(笑)。ところで、貴女の滞在中のご感想などを聞かせて頂く前に、私の不勉強もありますが、是非ハンガリーのことをお聞きがいたく思います。たくさんの国境に囲まれているわけでしょうし、もちろん海岸線はない。当然交通事情なども違うと思うのですが……。

パップ 国の面積は日本の1/3しかありません。しかも、貴方のいわれるように、周囲は他国と接しています。図にありますように、北はチェコスロバキア、東はルーマニア、ソ連邦ウクライナ、南はユーゴスラビア、西はオーストリアという具合で、首都のブタペストに向けて道路網が集まって来ています。このため、国境を越えて入って来る外国の車両も多く、ことに、国際トラックの事故には頭を悩ましています。

小林 行程、我々の様な島国では考えられないことですが、それだけに安全対策というのもむずかしい

面がおありでしょうね。

パップ 我々もようやく交通安全5ヶ年計画をスタートさせまして、幼児から運転者、さらに高齢者までを含めた幅広い政策を実施したわけです。

小林 ではその計画について、もう少し詳しくお話し下さいませんか。

パップ そうですね。まず表をみていただきましょう。1982年以来、ハンガリーの年間の死者数は減少

していません。もちろん日本との国土の広さ、車両保有台数の違いは大きいですが、人口当り、保有台数当りでもっとも、かなり高いのです。

小林 そうですね。我が国の10万人当りが7.6、1万台当りが1.3ですからまだ相当高いという印象ですね。西ドイツでは、それぞれ14.7と3.2ですから(1986年)、ヨーロッパとしては、まあまあという感じですが、車両台数当りの高いのが気になりますね。

パップ そうです。そこで社会主義国であるハンガリーも、交通事故による犠牲を何とか抑止しようと、政府が本腰を入れたというわけです。何しろ他国との車の交流が激しいですから。

小林 ところで、その成果といいますか、進行中のプログラムの内容はどのようなものでしょうか。

パップ この5ヶ年計画は12のプログラムから成り立っていきまして、大きくいって、幼児、就学児童、若者、高齢者への対策といったような、いわば生涯教育路線ということが出来ましよう。ことに、アル



ハンガリー国立運輸科学研究所主任研究員。交通心理学、特に幼児の問題に強い関心を持つ。英国TRRL、ウィーン交通安全研究所に研究滞在するなど、西側の研究事情にも精通する。

インタビュアー

小林 實



本誌編集委員。科学警察研究所交通部付主任研究官。専門は交通心理学、環境心理学。米国公衆衛生局研究員、フィリピン交通訓練センター派遣専門家等を歴任。道路交通に関する国際協力に関心を持つ。

コール問題と、大学のカリキュラムの中で交通教育の手法と、実際の運転実技を教科に組み入れていることです。これらの卒業生に将来、指導員となってもらおうという仕組みです。

小林 なるほど、IATSS でも警察庁からの委託を受けて、「体系化に関する研究」を行いました。いまパップさんのいわれるような、生涯的にみて糸の切れない、連続性のあることが、現在一番要請されていることだと思います。お国で、一足先に実行に移されたことを参考にしたいと思います。ところで、アルコールの話が出ましたが、やはり、これによる事故は多いのですか。

パップ はい。年間の事故死の原因のうち、18%にも達しています。何しろ、アルコール消費量が、日本の平均の倍近くですから。

小林 ところでパップさんは、今回初めて日本に来られたわけですが、大変月並な質問ですが日本の印象というのはどうですか。

パップ 大変良い質問ですが、どうも私はインタビューに慣れていないのですから、むずかしいですね。ブタペストから東京へ来てみますと、巨大都市の渦中に入った感じで初めての私にとって、強烈なインパクトがあります。ことに、色彩の違いに驚き

ます。

小林 私も都市の視環境に興味をもっていますが、もう少し具体的にいいますと？

パップ ブタペストの街の色彩とくらべて、派手というか、赤や黄の原色が多いですね。

小林 こうした視環境がそこに生活する人間のスピードや考え方まで左右するように私も考えています。大変興味深い御指摘です。

パップ 私が奇異に思ったことは、歩道を自転車か我がもの顔に走っていることで、これはハンガリーではありません。私が見た範囲でも、かなり歩行者に危険だと思ったケースがいくつかありました。

小林 どうも日本の折衷の痛いところをつかれました。ところで、我々としても、そちらの研究や交通実態をもっと知らなければ、共通の基盤で話することが出来ないことを痛感いたしました。これから、お互いに交流を深めたいものです。

パップ 是非、この学会のようなチャンネルを通して、日本との交流が出来ることを期待します。

(昭和63年9月26日実施。なおハンガリーの実態を知るために、図を入れたため、インタビュー後記は省略しました。)



年	死者数	負傷者数	人口10万人当りの死者数	1万台当りの死者数
1982	1,548	22,716	13.48	7.23
1983	1,591	23,895	13.92	7.93
1984	1,590	24,764	13.62	7.46
1985	1,756	24,840	14.96	7.76
1986	1,632	24,822	14.06	7.67

